

日本IT書紀

233 あとがき

12 補追 結

佃 均



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。

第二百三十三

あとがき

一

ことあるたび、

——こういう本を出したい。

といい続けているうち、気がつけば夏が過ぎようとしている。インタビュアーの結果に対して加筆修正ばかりでなく、教示をいただくことが先行して、いつまで経っても書籍が出ない。このままだと「狼少年」になってしまいそうで気持ちばかりが焦る。

いざ出版に向けて編集を始めるとさまざま迷いが生じ、かつ不足不備が目につくために改めて調べ直し、優柔不断のうちに二度三度と全面的な校訂が必要になる。書き手と編み手が同一でなければ、そのような不都合はまず発生しない。

——こうなれば目をつむって「エイヤッ」でやるしかない。

とは思うのだが、また優柔不断が頭を擡（もた）げる。

——総ページ数五千、全十巻。

という筆者の構想を商業ベースに乗せるのは、今日的情況ではどうやら無理であるらしかった。

——焦点を絞って、四分の一以下にしてみらえれば。

と某出版社の担当者は言った。

商業出版社にあつては、そもそも価値がないことになる。

——であれば。

というのが自費出版ならぬ自社出版を決意した事情である。世にある出版会社であつても、創業のときの思いは同じようなものであつたろう。

自社出版の母体であるナレイという会社について、やや補足しておきたい。（注：ナレイ株式会社は二〇一三年九月に法人登記を取り下げている）

フリーランスになったとき、偶然にも小学校時代の友人二人が同じような立場にあつた。それぞれが個人事務所を開くなら、いつそのこと共同で会社を興さないか、という無謀な発案が行われ、そこに「勢い」というものが加わって、とうとう形を作ってしまった。

その趣旨を、筆者は次のように書いた。

ナレイ株式会社は原則として、四十五歳以上のいわゆる「中高齢」のプロフェッショナル（フェロー）で構成しま

す。特定の企業内で専門職であつても、社会的・客観的に見たとき、プロフェッショナルであると認知されるかどうかのポイントです。

企業形態としては、参加する各自が各分野のプロフェッショナルとして自立しつつ連携、協業する〔アソシエイト・ファーム〕を想定しており、従つてインターネットを利活用したS O H Oが活動のベースとなります。

以下、この会社に参加するには一口の出資が必要であるとか、ポジション・ペーパーを提出しろだとか、いろいろなことを書いてある。インターネットを利活用し、ホームオフィス／オンライン・コラボレーションを企んだのは、いまから思えばやや先走りだった。

——はてこれが利潤追求の企業であり得るのか。

と、我がことながら首を傾げたくなる。

とまれ——。

情報産業とかかわるようになっておよそ三十年が経つ。それなりに分かっているつもりだったが、いざ書き始めると次から次に調べなければならぬことが出てきた。拾い上げた土塊の欠片をつなぎ合わせ、欠落を補つて復元した土器を眺め眇めつ、それが何物であるかを考え取捨する作業とはほぼ等しい。

二

足形を刻んだ平らな石を拝む風習がある。

仏足石と言われるものであつて、全国に百余を数え、天平勝宝五年の年紀を持つ奈良薬師寺のそれが最古とされる。足形があるということは、そこに仏陀が立っているのである、という信仰だが、まやかしと言い切れるかどうか。

何もない空間に、目に見えぬ何者かの姿を再現するという意味において、筆者の作業は仏足石を拝むのと似ていないでもない。

そういうことから本書は野辺の石、傍らの草ですら初源の計算の道具であつたことから書き起こし、ハードウェアとしては歯車とバネから手廻式機械装置、蒸気機関、電動機械装置まで、時間的には太古から昭和の終盤までを扱つた。

いつ、誰が、どのような機械装置を作つたか、何年の何月に誰が何をしたかという、暗記することが知識の習得であるかのような空しい歴史の授業でなく、あるいは仏足の形状を個々に分析するのでなく、そこに人々の息遣いが存在する——と読者諸氏が感じていただけたら、まず第一の目的は達せられる。

第二には、それは筆者の興味を惹いたことでもあるのだが、近代計算機械装置を使いこなすには「表」と「統計」の概念が必要だった。杉亨二という人物がその概念をうち立てた。

次に計算の仕事に機械装置を使うに際して漢数字からアラビア数字への転換という大きな意識改革があった。このことはあまりに当たり前すぎることで、存外に忘れ去られている。

古今風の浪漫主義を否定し万葉風の写生主義を唱えた正岡子規は、門人の句を評するのにアラビア数字で点数を付けた。句会においては総当りの星取りのような採点表を考案して、その集計はアラビア数字で行い、順位は漢数字で示した。明治から大正期にかけての和洋混淆はそんなところにも現われていた。

前島密という開明者が考案した郵便貯金の制度がなければ公文書にアラビア数字の表が採用されるのが遅れ、計算機械装置の普及にいましばらく時間がかかったかもしれない。

第三に、昭和初年にいたるまでの期間、経済環境の変動はいま以上に激しかった。欧米列強諸国と徳川幕府が結んだ不公平な金と銀の交換比率に基づく協商協定、金本位制から信用貨幣へ、国内資本の形成と蓄積から海外への投資

というプロセスにおいて、事務機器を輸入するに際して関税の問題が生じ、国産品愛用運動が政府の主導によって展開されたというあたりは、ついで一九七〇年代以後の軌跡と重なるようである。

三

本書を刊行するに当たって、様々な新しい経験をした。まず、編集の問題があった。

本文より補注を加えたり参照した文献やホームページのURLを再度調べるのにたいそう手間を取った。かつ、全体をどのように構成するか、迷うことが少なくなかった。それぞれの分量がまちまちでは、刊行を終え、書架に並んだときおかしなことになるであろう。

次に体裁という難問があった。表紙に張る布の色、織目、カバーのデザイン、本扉にワンポイントの図柄を入れるか入れないか、はたまた本文に使用する紙の色合いや斤量……。

それまで雑誌や年鑑ものは手がけたことがあったにせよ、新聞という決められた紙面と限りある記事の分量を前提としたルーチンの編集が中心だったから、いかさま戸惑った。家を建てるとき躯体の設計はできているのに壁紙や台所

の器具、照明などがなかなか決められないのとよく似ている。

それが終わったと思う間もなく、出来上がった書籍の販売に伴う在庫管理、発送事務、どうやって予約を受けるか、請求書、領収書をどうするのか、残る四分冊の印刷経費をどう捻出するかといった課題が浮き上がった。

こういうことには全く素人なので、手違い・間違い・勘違いを繰り返しつつ、ようやく一つの仕組みが出来上がった。

なるほどこういうことであれば、既存の商業出版社に任せるのが得策だったかもしれないが、インタビュをさせていただいたり資料を提供していただいた方々に直接、

「おかげさまでこのような本になりました」と手渡して行きたい気持ちがあった。

とはいえ、本書は日中戦争、太平洋戦争、後編が戦後復興と経済成長の物語など紆余曲折がおり混じって、インタビュの成果をあまり反映できていない。

ただ、イギリスに生まれたランチェスターの法則がアメリカに渡ってOR（オペレーションズ・リサーチ）の手法を生み、それが計算機によって具体化したこと、計算機の技術によって生成された暗号が同じく計算機によって解読され、計数処理に基づくシミュレーションが行われ、連合

国軍なかんずくアメリカ合衆国軍が的確に日本の工業生産力を解明していくプロセスは興味ふかい。

さらにいえば終戦後の国産電子計算機開発は多くの挑戦者によって担われ、そのコロロザシが政策を動かし産業の発展に結びついた。器具もなく道具もなく、文献のみを手がかりに半導体を作り出していく研究者の姿は、明治・大正期に計算機の国産化を考えた川口市太郎、大本寅次郎などと見事に重なっている。

四

全くの偶然で、旧版の第一分冊を刊行したのは二〇〇四年度情報化月間の初日だった。そのことを話すと、日本情報処理開発協会の河端照孝特別顧問が早速推薦文を書いてくださり、加えて同協会会長の児玉幸二氏に「情報化推進国民会議議長」として一文を寄せていただく手配までしていただいた。

児玉氏は最初、

——キミと初めて会ったのは、ボクが情報振課の課長のことだったかな。

と、やや誇張気味にさかのぼる口調だった。

のち本庁の玄関で公用車から出てきた通産省事務次官とし

ての兎玉氏とバツタリ出くわした。

「よお、生きていたか。最近、とんと顔を出さないな」

「局長や次官からはホットな情報は貰えませんがね」

というような会話を交わした記憶がある。

生意気であった。

「情報産業の方向性について話すことぐらいはできるさ。

思いはキミと同じだ」

という言葉に感じるものがあつた。

そのときのことを同氏も覚えていてくれた。

課長時代にも兎玉氏は

——ソフトウェアの価値をどう評価するか、そのためには法的保護や知的財産の認識を産業界に訴えなければならぬ。それを適正に施策化することが日本の国際的地位を高める。

という考え方を明確に示していた。それは現在も変わりが無い。

——官僚。

この言葉は、ある特殊な意味を伴って使われることがある。

だが、初代電子政策課長の平松守彦氏を筆頭に、情報産業にかかわる政策マンは熱心に業界の声に耳を傾け、徹夜も辞さず「日本」のあるべき姿を懸命に模索していた。

彼ら政策マンが自分達の居場所を「エレムコ」（エレベーターの向こう側）と呼び、テレビドラマ『若者たち』の主題歌「君の行く道は果てしなく遠い……」を咆哮し、省の読みに濁点を加えて「ツウジョウ残業」省と自嘲したのは、その裏の矜持と表裏の関係にある。

筆者のような一介の業界記者に対してさえ、政策マンたちが情報産業の未来を語るとき、その熱い思いがひしひしと伝わってきた。

八四年に社団法人ソフトウェア産業振興協会と社団法人日本情報センター協会が合併して情報サービス産業協会が発足した。その前夜——まさに記者会見の前日の午後——通産省旧本館の五階で練り広げられた喧々諤々の議論が、端的にそれを示している。

ときの課長・柴崎徹也氏を中心に若手政策マン、ソフト協とセンター協の幹部たちが鳩首して机を叩き、「情報サービス産業の将来」「ネットワークとソフトウェアの時代」を論じていた現場に、筆者はたまたま居合わせた。

そういういたこととは稿を改めるべきであろう。

卷十三「乗炬」以後では主に一九六〇年代の出来事を描く。IBM社との基本特許問題、国産電子計算機の開発、産業界における新しいビジネスモデルと情報の活用、さらに受託計算センターやソフトウェア業の成立といった話柄

が陸続と出てくる。

ある一定の年代の人々にとっては、まさに「我らの時代」であろう。その熱気というものを、少しでも伝えることができれば筆者の目論みはまず一つ達せられる。

五

二〇〇五年一月二十日、東京・虎ノ門の某所。

会合は「午後六時半から」ということだった。だが、刻限が近づいても受付を通過した人の数はまばらで、案内に立つ係の人に慌てた風もない。

——これは自分が時間を間違えたのではないか。

筆者はロビーのソファに座りながら、ひそかに疑っている。

そのうち何人かが連れ立つガヤガヤとした空気が生まれ、元知事が姿を現した。

元知事というのは平松守彦氏である。

「よお、来とったか」

相変わらず血色がよく、声に張りがある。

「とりあえずご挨拶だけ」

会の正式なメンバーではないので遠慮しようとする、元知事は言った。

「なに、構わん。一緒に来たまえ」

会場に入った数分後に元知事による挨拶は終わり、乾杯となった。実際に始まったのは七時に近かったが、気が知れているからか、手際よく会が進んでいく。

「電政会」の新年会なのである。通産省機械情報産業局電子政策課のOB・OG会。一九六〇年代末から七〇年代初期に活躍した廣田慶次郎氏、坂尾彰氏といった古豪に混じると、林量造氏や澤昭裕氏、藤原達也氏などは、若手に入るらしい。

元知事はその会長を務める。

——ゲンエキはどうした。

——彼らはまだ仕事でしょう。

——相変わらず濁点だな。

ゲンエキとは「現役」、濁点とは「通商産業省」に濁点を付けて読むと「ツウジヨウ・ザンギョウ（通常残業）省」になることを指している。現役の職員たちは来年度施策の詰めに追われているのに違いない。

ややあってドヤドヤと若いゲンエキたちが流れ込んできた。

——これで揃った、揃った。

——じゃ、歌にしよう。

待ちかねていたように声が上がった。

——さ、みんな肩を組むぞ。

カラオケの演奏が流れる予定だったらしいが、何の手遣いか、会場側が用意したのは「明日に架ける橋」だった。ワツと笑いが起こった。

——いいさ、音楽なんかなくなっちゃって。

——そうですよね。

——じゃ、行くぞ。

号令がかかった。

時ならぬ咆哮が始まった。

居合わせた全員が肩を組み、左右に体を揺すって、エレムコの唄を歌う。世の中では「若者たち」の名で通っている。現在は経済産業省商務情報政策局情報政策課と名称を変えているが、なるほど、エレムコの伝統は健在なのだ。た。

六

編集に当たって、筆者はやや混乱を起こした。

第百一「国産メーカー」のあたりから、気持ちの上では「一九六〇年代後半のことを書き連ねる」つもりなのに、つい五〇年代の話に戻ったり七〇年代に飛び、さらには八〇年代のことまで触れてしまう。そういう部分が少なくな

かった。

あるところは意図して書き、多くは書いたあと、残すべきか削るべきかを悩んだ。読者にあつては「いい加減にしろ」と言いたくなるに違いない。

第百七十九「赤軍」以後は一九七〇年代のことごとを扱った。赤軍派のこと、三島由紀夫のこと、ドルシヨック、オイルシヨックのこと。そうした中に登場したIBMシステム／370の衝撃と国産コンピュータ・メーカーのグループ編成、ソフトウエア・モジュール技術開発プロジェクトのこと、通信回線の第一次開放とDIPSのこと。

そういうことを話したとき、某氏から

——それじゃ八〇年代からあとのことはどうなるんだ。

という指摘を受けた。

——ですから、いま出している『日本IT書紀』は第一部ということになって、それで「通史要覧」という副題を付けているわけでして……。

答えると某氏は形相を変えた。

筆者の言葉を解釈するのにはしばらく時間がかかった。

氏は気を取り直して、言った。

——ということとは、だな。

——そうなんですよ。八〇年代のことは『日本IT後紀』、九〇年代のことは『日本IT続紀』というようなた

イトルにしてくださいね、それぞれ五分冊で書こうかな、と。

細かく説明するまでもなく、氏は呆れた。

考えてみれば、一分冊当たり六百ページ、それを合計十五冊となると、とうてい読みきれものではない。いや物理的にいえば、読みきることはできるかもしれないが、まずその意欲を失う。

——索引があるといいですね。

というご指摘もいただいた。

一人で作っているのです、しばらくお時間を、というのが筆者の答えだった。何もかもいっぺんにできるものではない。いやそれ以上に資力、体力がもつかどうか——と内心で呟きながら、時が過ぎて行く。

また無茶を働くかもしれないが、それはそれ。

なにまれお読みいただければ多謝とするところである。

日本IT書紀 233 あとがき

著 者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
<http://www.ossaj.org/>
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。



© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳細な内容は <https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja> でご確認ください。